

<p>佐賀県玄海沿岸海域における地球温暖化による漁場環境・水産生物への影響調査</p> <p>梅田 智樹・千々波行典・伊賀田邦義・広瀬 茂・秋山 秀樹・山田 東也・種子田 雄・村上 憲男・臼井 雅一・伊賀上孝徳</p> <p>水温上昇の主な要因として、気温及び風向風速等の気象環境や対馬暖流の流勢が推定された。当該海域の主要定置網で漁獲されるスルメイカ、ヤリイカおよびアイゴ等の漁獲状況変化は、水温変動が水産生物へ及ぼす影響評価の指標となる可能性が示唆された。将来の水温予測では、表層では2050年までに0.54~0.99℃上昇することが予測された。また、将来の水温上昇にともない2050年にはカタクチイワシ及びクロアワビの産卵期、アラメ及びホンダワラ類の成熟期等への市況、さらに藻場の衰退等が起こる可能性が示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (1-22) 2012</p>	<p>唐津湾におけるシロギスの漁業実態と資源動向</p> <p>山口 忠則・金丸彦一郎・上田 拓</p> <p>佐賀県唐津地区におけるシロギスの漁獲量は6月が最も多く年間の約25%を占め、そのうちの7割以上が刺網漁業によって漁獲され、そのほとんどが親魚であった。これら親魚の生殖腺指数を調べたところ、唐津湾では7月から8月頃が産卵盛期であると考えられた。唐津湾のシロギスは、1993年以降、高いレベルのFで漁獲されており、産卵親魚量は2002年頃の数年間を除いて常に減少し続けていた。シロギスの資源量を回復させるためには、佐賀県唐津地区と福岡県糸島地区の刺網漁業者が6月に産卵親魚を獲り控え、卓越年級群の発生を待つ必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (23-28) 2012</p>
<p>佐賀県唐津湾海域におけるクルマエビの種苗放流と漁獲との関係</p> <p>山口 忠則・金丸彦一郎</p> <p>佐賀県唐津湾海域における小型底曳網漁業のクルマエビ漁獲量を詳細に調べたところ、毎年ほぼ1回、当歳の個体を主体とした短い漁獲のピークが8月から10月に見られた。これは6月上旬から7月中旬に集中放流された体長4cmサイズの種苗が成長し、まとまって漁獲されるものであると考えられ、当該海域におけるクルマエビ漁業が種苗放流に大きく依存していることが明らかになった。今後は種苗放流の費用効果を向上させるため、唐津湾の環境収容力考慮した適正な放流尾数や初期の生残率を改善するような放流方法を検討する必要がある。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (29-34) 2012</p>	<p>カサゴの共食い発生に及ぼす全長差の影響</p> <p>江口 勝久</p> <p>種苗生産時に発生するカサゴの共食いに全長差が与える影響を検討するため、異なる全長のカサゴで1対1飼育試験を行った。その結果、カサゴの共食いは、捕食魚と被食魚の全長比が概ね1.3以上で発生する可能性が高くなることが明らかとなった。この1.3という値はこれまでの共倒れによる共食いの観察に基づく全長比1.5よりも低く、共倒れの観察のみでは共食いが発生する全長比の下限については明らかとならないことが示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (35-38) 2012</p>
<p>カサゴ人工種苗の鼻孔隔皮欠損出現状況</p> <p>江口 勝久</p> <p>種苗生産されたカサゴにみられる鼻孔隔皮欠損の放流魚標識としての有効性を検討するため、センターで生産されたカサゴの鼻孔隔皮欠損状況を調べた。その結果、片側もしくは両側の鼻孔皮欠損割合の平均値は32.3%であった。また、当センターで同様の方法で生産されたカサゴでは、群間での鼻孔隔皮欠損出現割合の差異10%以内で、他機関との差異と比較して軽微であった。以上より、欠損出現割合は低いが生産や生産回次に関わらずほぼ同じ値を示すため、内海域での標識としての有効性は十分あると考えられた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (39-41) 2012</p>	<p>ガンガゼ <i>Diadema setosum</i> の採卵と飼育</p> <p>野口 浩介・福元 亨</p> <p>ガンガゼ <i>Diadema setosum</i> の初期生態(卵~遊期~着底期まで)について、未だ不明な部分が多いため、初期生態の解明を行った結果、飼水温23℃以上で全ての個体が採卵誘発に反応した。ふ化した浮遊幼生にキートセロス・グラシリスを給餌し、飼育したところ、順調に成長しなお、浮遊幼生の形態がアカウニとは大きく異なっていた。ふ化後21日目に稚ウニへの変態、着底を促したところ、稚ウニに変態し、その後活発的に付着珪藻を摂餌する様子が観察され、採苗後60日目で殻長3mm、90日目には約4.7mm、120日目には約6.3mm、150日目には7.0mmにまで成長した。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (43-45) 2012</p>

<p>佐賀県伊万里湾における地まき養殖アカガイの成熟 江口 泰蔵・千々波行典</p> <p>2006年6月及び2007年6月に地まき放流したアカガイについて、生殖巣の観察は2007年12月まで、身入り度、肥満度は2008年12月まで調査を行った。その結果、身入り度、肥満度は、夏期に減少し、秋期以降に回復、冬期から春期にかけて最も高くなる傾向を示した。成熟状況は、生殖巣の肉眼観察結果から、成熟年齢は1歳で、成熟時期は5月下旬から10月頃までであり、成熟個の割合や生殖巣厚の推移から判断すると、6月～9月頃に産卵が行われたと推察された。また調査月毎の性比の偏りから性転換が起きている可能性が示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (47-51) 2012</p>	<p>佐賀県伊万里湾における地まき養殖アカガイの成長及び回収状況 江口 泰蔵・千々波行典</p> <p>2006年6月に地まき放流したアカガイについて、2009年3月まで成長の調査を行うとともに出荷サイズに達したアカガイは回収を行った。その結果、2006年6月に平均殻長33mmで放流した稚貝は、1年後には65mm, 69g, 試験開始から1年10ヶ月後の2008年3月には76mm, 114g, 2年6ヶ月後の2008年12月には78mm, 118gまで成長した。回収は、調査期間をとおしてほぼ放流場所の範囲内で行い、延べ37日間の総回収個体数は9,921個体、回収重量約1トン、累積回収率は27.7%であった。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (53-56) 2012</p>
<p>佐賀県唐津湾における養殖イワガキの成熟 江口 泰蔵・千々波行典</p> <p>唐津湾における養殖イワガキの成熟状況を把握するため、2007年4月から2008年3月にかけて身入り度や生殖腺指数の調査を行った。その結果、養殖イワガキは、4月以降の水温の上昇とともに身入り度、生殖腺指数ともに上昇し、水温が25℃を超えた8月下旬に最高値を示した。その後、水温の下降に連動して9月下旬には生殖腺指数は急激に低下した。これらの結果から、2007年の唐津湾の養殖イワガキの産卵時期は、8から9月であったと考えられた。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (57-59) 2012</p>	<p>増養殖環境における微生物の生態と利用に関する研究 野口 浩介</p> <p>本研究は、抗ウイルス・抗病原性細菌の機能を持つ拮抗細菌を利用して魚介類の疾病を生物的に防除し、なおかつ、魚介類の成長を促進するバイオコントロール方法の確立を目的とした。その結果、次のことが明らかになった。①有用(拮抗)細菌の投与により病原菌が抑制された。②有用細菌を飼料とした場合、魚類の免疫機能が向上した。③有用細菌の利用において、養殖魚の成長促進、生残率の向上効果があらわれた。④有用細菌の投与により栄養塩の減少、すなわち養殖環境の向上効果が示唆された。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (61-91) 2012</p>
<p>(ノート) 佐賀県玄海海域における主要定置網の漁獲量および魚種の変遷(予報) 寺田 雅彦・梅田 智樹</p> <p>佐賀県玄海海域沿岸の定置網の漁獲量は、梅田によって1983～1998年のデータが整理されており、本報ではこれに2010年までのデータを追加し、1983～2010年の28年間をとりまとめ、主要な魚種の漁獲量の変動傾向を把握した。</p> <p>その結果、1980年代の漁獲量を支えていたマイワシの漁獲量減少や、1990年代以降にマアジの漁獲量増加など、主要定置網及び主要魚種の漁獲量の変動傾向の把握をすることが出来た。</p> <p style="text-align: right;">佐玄水振セ研報5 (93-99) 2012</p>	